

家庭・保育所・幼稚園・小学校連携の課題に関する一考察 －質的分析を中心に－

Issues in Family, Preschool and Elementary School Collaboration:
Direct and indirect interview analysis.

北 野 幸 子 三 村 真 弓 吉 富 功 修

Sachiko KITANO

家政教育講座

Mayumi MIMURA

広島大学大学院

教育学研究科

Katsunobu YOSHITOMI

広島大学大学院

教育学研究科

(平成17年9月30日受理)

抄録

The purpose of this study is to reveal current issues in family, preschool (Yochien and Hoikusho) and elementary school collaboration to enforce the elementary school transition. In order to dissect the issue deeply, we planed qualitative research, through direct and indirect interview (by telephone and e-mail). We selected examinees from 4 categories, ①administrators (a vice president of a preschool and a school counselor of a board of education), ②elementary school teachers, ③preschool teachers, and ④supplementary private music lesson school's teachers. We also sent out questionnaires to all elementary schools and preschools in Saga-City. In the questionnaires we asked people to write free description on issues in preschool to elementary school transition in music education. We pick the issue in music education to make the point more practically.

In the interviews administrators have shown deep understanding in needs of school transition program. However, the board of education has only a form to report and share the information about; children's health and physical condition, family context, and social skills and habits, but nothing about the contents of children's learning experience. The vice president of preschool told us that they do plan some event to sharer experience with elementary school children but they only visit and play together. Through data from our questionnaires, we found that elementary school teachers feel that there are big differences in experience between preschool institutions and each child's family educational backgrounds. It was also made clear that though preschool teachers understand the needs of transition program, they have never thought of sending educational experimental records or data to elementary schools, as they do not taken it as their urgent problem. A preschool teacher told us that she feels a wall to elementary school teachers and feels it hard to collaborate with them in education. The supplementary private lesson schools' teachers also show the feeling of a wall to elementary school teachers and never tried to make contact to collaborate or sharer information.

In this study we made it clear that there is widely spread recognition in needs of transition activities, but only a few teachers take it and state it as own task, and have made it in their practice. The possibility and model example to construct collaboration system was suggested from our research.

Key Words : early childhood education, transition to elementary school, family education

1. はじめに

小学校1年生のクラスが崩壊状況にあるという「小1プロブレム」が指摘されて数年経つ。論者等の近辺でも、小学校一年生の担任になったので、退職を早めようかと悩むベテラン教員や、「2、3年前から小学校の入学式の様子がおかしい」と指摘する教育委員会の相談員、挨拶のできない子どもの増加を指摘する校長の声などが、実際にある。「小1プロブレム」が指摘されて数年経つが、これは奇しくも、エンゼルプラン導入後10年ちょうどその年齢の子どもたちの姿である。家庭の変化、家庭教育の外在化の進行が指摘されている今日、家庭、保育所、幼稚園、そして小学校を結ぶ工夫が今後益々重要となってくると考える。

家庭と、園、小学校の連携が重要な課題であるという認識は広まりつつあり、連携の必要性はしばしば指摘されるようになった¹⁾。現在、園と小学校同士が相互に訪問し、共同イベントを実施するなど、子どもたちの交流や教員の交流などが実施されつつある。しかし、小学校1年生への移行プログラムの開発は立ち後れている。実際に汎用可能な教育プログラムや授業をつくるための教材開発には至っていない。公的なプログラムや基準が存在せず、小学校1年生のクラスの担任は、就学前の保育所、幼稚園での子どもたちの教育内容や家庭での経験に関わる情報が全くない状況で、授業の計画を立て実施している。

カーター等(Corter, C.)は、一連のプロジェクトで家庭と教育機関の連携の教育的効果を立証し、家庭との共同の重要性を指摘している²⁾。我が国の「子育て支援」という語は、幼稚園・保育所からの家庭支援という一方向のイメージを創出しがちであるが、実際に必要であるのは双方向の協力である。複数の機関(家庭、保育所、幼稚園、小学校)の双方向の連携体制の構築は今後の大きな課題であるとする。この課題の解決の糸口を探るべく、本論で論者らは、家庭、保育所、幼稚園、小学校の連携を図るために、また、今後、移行プログラムと教材を開発するための基礎資料として、現状と課題の分析に着手している³⁾。本研究はその関連研究である。

本論では特に、家庭、保育園、幼稚園、小学校の連携に関する現状と課題を質的に検討することを試みた。

2. 方法

本論では、課題の質的な検討を試みるために、(1)直接・間接インタビュー(電話とメールによる

往復)と、(2)アンケートの自由記述の方法を用いて調査を実施した。以下、その方法について説明を加える。

(1)直接・間接インタビューの概要

対象：以下の4つのカテゴリーに分類し、インタビューを実施した。

- ①小学校教諭
- ②行政・管理者
- ③保育者
- ④民間教育機関教諭

各カテゴリーのインタビュー対象者は以下のとおり。

- ①小学校教諭：Aさん
- ②行政・管理者：幼稚園副園長Bさん、教育委員会相談員Cさん
- ③保育者：DさんとEさん
- ④民間教育機関教諭：FさんとGさん

時期：2004年2月～2005年2月の間

方法：

- ①直接インタビュー：Aさん：3回：各1時間程度、Bさん：1回：1時間程度、Cさん：3回：各30分程度
- ②間接インタビュー：Dさん：メール4往復、Eさん：電話1回：1時間程度、Fさん：電話2回：1時間程度、Gさん：メール2往復

内容：家庭・保育・幼稚園・小学校の連携の現状と課題について、具体的な経験を中心にインタビューを実施した。

(2)アンケートの自由記述

領域を音楽領域に精選し、より具体的な内容を得るために、質問紙調査では、音楽教員を対象に実施した⁴⁾。

対象：

- ①Z市内及び近郊の小学校計36校の第1・第2学年担任と音楽部教諭(音楽部主任、音楽部副主任、音楽部、金管担当、音楽専科)
- ②Z市内保育所と幼稚園計52園

時期：2004年11月

回答数：小学校141名、保育所・幼稚園187名

回収率：小学校が27/36校、保育所・幼稚園が30/52園

内容：音楽教育に関する、小学校との連携と小学校への期待について

3. 結果と考察

以下、(1)運営・企画者、(2)保育者、(3)小学校教員、(4)音楽教室関係者への調査結果に分けて紹介し、考察を加える。なお、自由記述は記載どおり

とした。インタビュー対象者の会話は「」内とし、「」の中の（ ）はインタビューによる補足である。「」の外の（ ）は、インタビューによる質問などである。

(1)運営・企画者への調査結果と考察

ここでは、Bさんへのインタビュー結果、Cさんへのインタビュー結果を中心に紹介する。

<Bさんへのインタビュー>

Bさんは児童館と幼稚園を運営されている方であり、自らも数十年幼稚園現場経験を有している。

①保育所、幼稚園、小学校の連携について

「それが今、まず、結論からいうと、大切で必要だと思います。一人知ってる先生も、もともと幼稚園の先生をされていたのですが、幼稚園での子どもが入学した後、子どもの生活態度などがちょっと変わってきた（ことがありました）。悪い意味で変わってきたんですね。どういう状況で、どういう風なことを学校でしているのかということ、改めて教職の免許取り直して。（一部省略：以下…）幼稚園の内容などと小学校の内容などを両方、理解しておれば、子どもへの対応なども違ってくるでしょうし。ですから、（…）特に、今の時期、幼稚園は幼稚園、保育所は保育所、学校は学校、と言いながら、（…）知的な面も、それから情操的な面も一緒ではないかと。（…）もちろん、保護者との連携も大切なんです。やはり学校は教科教育の場ですから、知的な面でしようけれども、やはり人として大切なのは、やはり内面的なことが大事だと思います。（…）ですから、幼稚園からずっと、学校あがるまでずっと一貫したそういう連携の下にいろんな勉強を進めていければ、と思います」

「幼稚園と保育所を比べた場合に、保育所はあくまで保育に欠ける子どもさんを預かるという形でしょう。知的なものも確かに熱心にされている保育所もあるんですが。（…）やはり学校の先生はその点では戸惑われる方もあるかと思います」「幼稚園・保育所は知的なものよりも、遊び。で、遊びもできない子どもさんが中にはいるんです。経験がいちばん大事でしょ。（…）（現在の問題として）放任という名の子育て放棄、これがあります。で、過干渉、干渉しすぎと。過干渉と、放任と。（そこに家庭と園の連携の必要性が高まっています。）」「私どもでは、偶然生活科が何かで、園の近くを小学校の先生と子どもさんが通られたことがあり、（…）一度訪問してもいいですか、と言われて、それで幼稚園に小学生が訪問されるというよ

うな交流をしています。（…）園児が進学した後に、保護者の方から連絡を頂戴したり、といったこともあります。」「教師は、今年はありません、来年勤めれば来年もあります。ずっと、あるわけですけども、子どもはその日、一年しかないわけでしょう？（だから連携は重要です）」

②音楽教育について

「幼稚園で高度なことをやっても、小学校ではそうではいけない、まあ、要するに一律ではないですからね。進学される子どもさんのそういった能力的なものは。ですから良い悪いはまた別として。あのやはりその年齢に応じた音楽活動なり音楽教育ができておれば、特別その難しいことをしていなくても、と思います。形にとらわれ、（無いことが大切）ですね。（…）たとえば小太鼓ならバチ打ちがあるでしょ。確かに正式なもち方はあるんです。でも、じゃ、それをその追求するがために、本来のリズム遊び的なものできない、（のは問題だと思います）。将来じゃあ小学校の先生とかがですねバチ打ちというか、太鼓の専門を育成しているわけではありませんで、とにかく楽しくその場合きちんとできておれば。ただ、その同じバチを使うにあたって太鼓の皮をいためないように、確かにその指導は必要だと思いますが、基本はあくまで子どもが楽しめるということだとするんですね。形は二の次です」

<Cさんへのインタビュー>

Cさんは、X町の教育委員会の相談員である。

①保育所、幼稚園、小学校の連携について

「2、3年前から小学校の入学式の様子がおかしいんです。（…）「ご入学おめでとう」といっても挨拶が返ってこないんです。（…）幼稚園や保育園、家庭での人間関係を知りたいな、っと思って」

（小1プロブレムについて）

「ここ数年、すごく感じます。（…）夏休み研修で（小学校）1年生の担任から、コメントや悩みを打ち明けられる。（…）突然立ち上がるとか、人間関係、生活習慣、家庭についてが多い」

（小学校に提供される保育所・幼稚園からの情報について）

「発達、障害に関するものです。書式もあります」

（相互交流について）

「就学前に小学校に訪問するといったことはやっています。（…）1年生担任予定者と園の教諭との共同会議も。」

②連携への展望

（インタビュアーの「幼稚園・保育所全ての月案や年次計画、あるいは、活動の記録のようなものを各小学校に提供してもらう、というのはどうですか。むずかしそうですか」との提案を受けて）

「それは、提案してみましょう。できると思います。（…）必要な時に、どんな楽器を弾いていたのかな、どんな運動をしていたのかな、どんな本を読んでいたのかな、ってね。活用できるものね」

Bさんのインタビューから、連携が必要であるとの意識が強いこと、連携のシステムは構築されていないが、独自に近隣の小学校の訪問を受けていること、音楽教育に関しては、かなり力を入れていること、しかし、形式ではなく、遊びを中心に実施されていることが明らかになった。本園では、音楽教室を午後実施していること、しかし、トレーニングと化さないように努力していることが分かった。またその他、育児放棄あるいは過干渉という問題があるが、そういった問題についての問い合わせは小学校側からは、ないとのことであった。

Cさんへのインタビューは数回実施された。その結果、教育相談室の現場では、子どもの家庭教育や就学前の施設保育の課題が強く意識されており、その対応が具体的に計画されていることが明らかになった。Cさんの現場では、子ども同士の交流や教員同士の交流は実施されているが、音楽や他の教育にかかわる情報の提供やプログラムの相互開発には、至っていないことも明らかになった。

カリキュラム・月案などの情報提供が実施されれば、その結果を継続して調査したいと考えている。

(2)保育者への調査結果と考察

ここでは、D、Eさんへのインタビュー結果と、アンケートの自由記述の結果を紹介し、考察を加える。（なお紹介する内容の抽出には、本論では紹介していない他の現役保育者へのインタビュー結果も参考とした。）

<Dさんへの間接インタビュー>

Dさんは非常勤も含め保育経験7年弱の保育士である。

①保育所、幼稚園、小学校の連携について

「地域的な特徴があるからか、わりとありました」「小学校の先生から「保育所のころはどんな感

じでしたか?」と話を聞きに来られることもあったし、修了前に入学予定の小学校の先生と保育士が子供についての連絡事項を話し合うこともありました。修了前の5歳児に先輩の1年生の児童が学校の話をしてきてくれる日や逆に5歳児が小学校訪問をしたりということも。5歳児の担任をしていた保育士は、クラスの子たちが学校に行ったあと、都合がつけば、初めての運動会や音楽会などを見に行っていました。子供たちも先生が来てくれたと喜んでいました。修了児の保護者がちょっとしたことを話しに寄ってくれたり、こどもの通知表（…）を見せに来てくれることもたまにありました」

（修了前の5歳児に先輩の1年生の児童が学校の話をしてきてくれる日について、再度質問したところ）

「保育所のお昼寝の時間に来てたから、授業の一貫だったように思います。（…）年度末あたりに1回」

②連携への展望

「保育所にいた時の、まわりの先生方のおっしゃったことなんかを思い出してみると…保育所だと、家庭環境なり普段の行動なり、何か気になることがある子どもがいた場合、その子のことについて職員同士で連絡しあって気をつけて見守ったりフォローしたりすることが出来たのに、学校に行くとそういう「気になる子」に対するかわりが保育所時代と比べるとぐんと減ってしまう。だから、落ち着いてきてた子どもがまた気になる行動をするようになってる。」というような話をされたてたことがありました」

<Eさんへの間接インタビュー>

Eさんは、公立幼稚園で2年、育児サークルで2年、教育委員会採用の学校補助教員1年の経験を有す、元保育者である。

①保育所、幼稚園、小学校の連携について

「ほとんどなかったと思う。うちの幼稚園はたまたま隣に小学校があったので、卒園児さんの小学校での状況はみえていたけれども、あえて小学校の先生から接しようと言う形はなかった。小学校と幼稚園とでは壁があったように感じた」

「幼稚園と保育所についての情報は、小学校よりも保護者同士の情報の方が浸透していると思う。小学校の先生よりも噂次元だけど、よっぽど保護者の方が知っていた。公立保育所を卒園すると小学校でちゃんと座っていれなくて、私立のあの幼稚園の子どもとは全然違う、とか。ホント？」

って疑いを感じる意見が多かった。やはり、小学校の先生には、保育内容や子どもの姿を伝えないといけないうって思う」

(実際の交流について)

「うちでは、園長の交代があって、小学校からの天下りだったのね。つまり、小学校の校長が退職後嘱託で、園長でこられたわけ。それで、紹介しましょう、ということになって、年に1回、給食を食べに5歳児さんが小学校に出かけた。これはコネをつかった訳で、正式ルートではないし、私立幼稚園や保育所の子どもにはまったくそんなことはなかったみたい」[幼稚園の年長クラスの先生は、入学式に招待されたが、園の入園式や卒園式に小学校の先生は来てなかったな。(…)でも、校長同士の交流はあったようよ。入学前に小学校1年生担任予定者と、公立・私立の幼稚園や保育所の5歳児の担任みんなで集まることはなかった」

(幼稚園から小学校への情報提供について)

「就学検査に関する内容(の書式があった)、身長と体重など、生活についてコメントする欄があったが、ほとんど発達にかかわることだけ記述するものだった。障害を持っておられるあるいはその心配のあるお子さんについてだけ、特記していた。(…)性格、幼稚園で行った活動はゼロ。全く伝えてない」

(どんな楽器を使ったとか、どんな曲を歌ったとか、どんなリトミックをしたとか、そんな項目は全く小学校に伝えるすべが無いということですか。との質問に対して)

「子どもの性格についての気づきや、幼稚園で行った遊びを中心とした教育的活動については、ゼロ。全く伝えてない。その様式もないし、小学校から聞かれたこともないな。(…)幼稚園で保存する、20年くらいね、書類があるが、マイナスになる情報は書いてはいけないうと指導されていたのね。こちらの意図にかかわらず、記載されたことは、印象もあるし、将来にマイナスになってしまふかもしれないからって。そういった記録は残さないことになっていたのね」

「幼稚園の時とても元気で、毎日通園していた、自分のクラスの子どもが一時、不登校になったことがあるんだけど。小学校には、親が同伴でなんとか通っている様子で、随分心配した。(…)お母さんと一緒に登園していた姿や、体育の時間校庭の脇にお母さんが立っていた姿を見たことがあるのね。Qちゃんどうしたんだらう、って、何か助けてあげられないかしら、って。けど、小学校の

先生からは何にも問いあわせがないし、こちらから連絡することもできなかった…。小学校の先生には、幼稚園の先生に頼らない、というプライドというか、壁があったっていつも感じていた」

②連携への展望

(月案などカリキュラムを提供することについて)

「正直いって、私の園では、日案や月案をさほどしっかり書いていなかった。保護者に配布する、お便りを月に一回ぐらい。目標や活動、今月歌う歌や、遊びの内容について記録していた。提供できる情報としては、これくらいしか思い当たらないけど。(…)親に配っているものだし、小学校もそれを役立てることができると思う」

<アンケートの自由記述>

自由記述は回収したアンケート187名のうち43名、33園のうち22園から回答を得た。意見は47文が寄せられた。

①小学校との連携について

「現在小学校でどのような音楽の授業が行われているか知りません。連携が必要であれば、お互い見学会が必要になると思います」[どんな授業が行われているのか、内容が知りたいと思います]

「幼稚園時代に行ったリズム遊びなどから楽しく音楽の授業に取り組めるように配慮していけば…と思います(小学校低学年の音楽の授業内容がイマイチよくわかりませんが…)」といった、小学校との連携がなされていないとの回答が12あった。

②小学校での音楽教育への期待

「小学校での音楽授業(内容)は、荷になるところがあるように思う。就学前は、子どもたちが楽しいで取り組んでいる(音楽に対し)」[幼児は楽しい音楽、リズムカルな曲を聞くと自然に体も動き、ビョンビョンとはねたりして楽しい気持ちを表します。小学校低学年の音楽の授業も「音楽」と「心」と「体」が結びついた楽しい授業であってほしいと考えます][小学校から幼稚園に勤務するようになって、幼稚園で行っている手遊びや表現遊び、歌遊びなど、遊びの要素を小学校低学年に取り入れられたらもっと楽しい音楽の授業になるかもしれないなと思っています]など、「楽しい(く)」という語が含まれている意見が24あった。

また、「教育」という語にネガティブな意見も見られた。例えば、「教育」と考えるとかたいイメージがあるが、音楽の楽しさを幼い頃にたくさん感じてくれば…と思う」[授業に入る前に、まず「音楽の楽しさ」を知る事が大切だと思います。

“教育”ということばに関して、子どもたちが『学びたい』という気持ちを持たなければ、それは教師から子どもへと、一方通行なものになってしまい、教育は成り立たないのではないのでしょうか。したがって、就学前では、いろんな歌や楽器に触れること、親しむことが大切なのではないかと思います。その延長としての小学校低学年の授業へとつなげてほしいです。」「小学生になると、特に男の子は、歌をうたわなくなることが多いというのを聞いたことがあります。成長の過程ではずかしいと思う気持ちが芽生えたりするのは仕方ないと思いますが、低学年のうちから、子ども達が歌いたいと思うような歌をうたったりすれば少し違うのではと思います」

以上より、実際の連携が図られていないことが分かった。しかしながら、アンケートの自由記述からは、“教育”的でなく“楽しい”小学校音楽教育への期待が強いことが分かる。期待はあるが、実現が自らの課題として意識されていない傾向が感じられる。実際、積極的に「知りたい」、「連携したい」との回答は、自由記述からは2つのみであった。

一方インタビューからは、積極的に連携を必要としている意見、その実現のための提言も得た。

(3)小学校教員への調査結果と考察

<Aさんへのインタビュー>

Aさんは、2002年から約1年半、小学校1、2年生の音楽を担当されていた。実践などについて直接インタビューを3回実施し、書面による回答を1回得た。以下その内容をまとめる。

①保育所、幼稚園、小学校の連携について

「小学校で低学年の音楽の授業を担当していた時は保育所や幼稚園との連絡や連携は一切ありませんでした」「小学校と幼稚園が近隣であっても全く交流はありませんでした」「(勤務校ではありませんが)小学校の教育方針と幼稚園の教育方針は全く違っていました。幼稚園は自由でのびのび、小学校は生活全般から学習まで全てきちんと統制的でした」

②小学校1年生の音楽の授業で工夫したこと

「子どもの実態を知る必要があるので、歌唱のテストの際に、出身の園名と、家庭で音楽レッスンを受けているかどうか、ソルフェージュ(聴音、視唱、記譜)をやっているかどうかなどを1人1人に尋ねました」「授業で歌唱や器楽をする際に、

園でどんな歌を歌っていたか、鍵盤ハーモニカをどの程度、どういうふうに習ったかなどを聞くこともありました。」「情報収集に多大な時間と労力を費やしました」「個々の音楽経験および能力差を考慮し、鍵盤ハーモニカの教材を難易度の異なった3声部にアレンジし、小グループによる学習形態を採るなどの工夫をしました」

③連携への展望

「情報交換が非常に必要だと思いました。幼稚園・保育所間の情報交換も必要です。園によって音楽に対する考え方、力の入れ方が全く違う。小学校に上がったとき、先生も大変ですが、何より子どもがかわいそうです。スタートでコンプレックスを感じてしまうと、以後の音楽活動が楽しくできません」

<アンケートの自由記述>

自由記述は、①小学校1年生の授業で困っていることと②就学前教育への要望について訪ねた。回収したアンケート27校141名のうち、①については23校43名から79文の意見が、②については、23校62名から88文の意見が寄せられた。

①小学校1年生の授業で困っていることについて一番多い意見は、「音楽経験の差が大きいこと：教科書教材に歌ったことのある曲の重複が多いこともいる。反対に、まったく歌ったことがない、知らないという子どももいる。器楽に関して、同様。表現や読譜能力の差が顕著」「保育所・幼稚園では、その特色(何に力を入れているか)で入学時の様子、達成度(力など)が全く違います。

(例えば、マーチングに力を入れているところと、鍵盤をやっていないところでは天と地の差がある。)その子ども達を一齐に…となると難しい面が出てきます。(それを指導するのが私たちの仕事だとは思いますが) また“燃え尽き症候群”も見られ、残念です」「いくつかの幼稚園や保育園から入学してきますが、各園により力を入れて指導される面が違い、歌や鍵盤ハーモニカに関しても能力に大きな差がある。一齐指導が難しいことが多い。」といった、就学前の音楽経験の差が著しく困っているとの意見が一番多く、30の意見が寄せられた。

次に多いのは、園での音楽教育の質の低さを指摘するもので、15の意見が寄せられた。その中で特に多いのは「大きな声で怒鳴ること。歌うとどなるの区別がつかないこと」「元気な声でとうながすと、ただどなりちらす状態なので、音をしっかりと歌わせたいと思っている」「歌うことは大

好きで音楽も好きだが、音程はいまひとつである」など、元氣よく歌うことが怒鳴ることとなって音程がはずれやすい子どもが多いこと、園での経験が音程の取りにくい子どもを育てているとの指摘がみられる。次いで「幼稚園で難しい曲を歌ったり演奏したりしてきているわりには、基礎基本ができていない」「鍵盤ハーモニカを演奏する時、吹き口をくわえずぎているのがなかなか治らないこと」「就学前の園においてどれだけされたのかの違いが大きく、鍵盤ハーモニカにおいては差が著しい。曲は場所シールなどを使って弾けるが、しかし、吹くこと、指の押さえ方など基本的なことが押さえられないままのこともあり、直していくのに時間がとられる」など、基礎基本を重視して欲しいと願っていること、間違えて覚えるように教えるならば、むしろ教えないで欲しいとの意見が見られた。

3番目に多い回答は、音楽教育以前に生活態度にかかわる問題で、11の意見が寄せられた。「音楽の授業の前提となる話の聞き方、集団行動などのしつけができていない子が多い。幼稚園、保育園等で子どもを自由にさせすぎているのではないか」「“おはなしをきく”という基本的な学習態度が身に付かないまま1年生を迎え、学習中の規律を身につけさせるまでが苦労しました」といったものがあった。

②就学前教育への要望について

一番多い意見は、「就学前はとにかくたくさん楽しい歌を歌い、音遊びをし、踊り（身体表現）音楽を楽しむ子を育てて欲しい」といったもので、「楽しい(く)」という語が含まれている意見が25あった。

次に多いのが、音楽活動・経験を豊富にして欲しいとの期待で、「音楽大好き!!」の気持ちをいっぱいもって入学してくれることを望みます。歌唱能力より「いかに歌を歌ってきたか」という経験、音楽にふれる時間の多さが大切だと感じます」「就学前はとにかくたくさん楽しい歌を歌い、音遊びをし、踊り（身体表現）音楽を楽しむ子を育てて欲しい」など、23の意見が寄せられた。しかし、一方で、技能教育は否定しており、「園によってはマーチングや太鼓など熱心に取り組まれているところがあるが、楽しくやる、楽しむのであればよいが、それ以上の訓練的なものはいかがなものか」「マーチングも、見ると感動しますが子どもには苦しい試練のようで…（我が子はちなみに嫌いだした。）」「園の目玉にしてやりすぎにならないようにしてほしい。特に器楽やマーチング。音楽嫌い

にしないでほしい」「読譜（階名）は小学3年生で出てくるので譜読みにこだわることはないと思います」「無理に奏法の指導をしておくべきでない」「技能面は小学校で十分のばしていけます」など、16の意見があった。

発達適切性を考慮することが大事であると指摘する意見は「小学校の低学年での音楽指導は、中・高学年とまた違ったものであるように感じることもありました。それぞれの発達段階に応じた保育所・幼稚園・小学校連携音楽カリキュラムができれば、その辺りのこともすっきりとしそうです。さらにそれが中学校につながっていくものになると思います」「小学校の現場と同じく、日々の生活指導、対外的行事参加の指導、本当に大変だと思います。ですから、朝・帰り・保育カリキュラムの中で発達段階に応じて手遊び歌、お遊戯、等に親しむことで十分ではないかと思います」の2つの意見があり、さらに連携については、「情操教育の意味合いも含め、小さい頃から音楽に関心を持たせることはとても大切であり、幼・保・小の連携が推進されればと思います」「小1の担任をしていますが、保育園、幼稚園との交流は質問にあげられる問題に答える程、深くあっていないのが現状です。知りません。そのため、質問“幼保の音楽教育は十分か否か。”というような問いは非常に答にくいです。もちろん、幼保でどのような音楽教育を知るのはとても大切かもしれませんが、そこまでは分かりません。逆に“こういうことをしている。”と教えてもらうととても助かります」の2つの意見があった。

以上より、インタビューからは、現状では対処療法として情報収集に努めていること、それに労力を有していること、また実践の工夫が紹介された。また、小学校特に1年の担任からは、連携の切実な必要性が提示された。就学前の音楽教育については、発達に適した音楽経験を提供できていない、技能教育に偏重するのは良くない、と否定的な意見もみられた。

(4)音楽教室関係者への調査結果と考察

<Fさんへのインタビュー>

Fさんは、音楽教室の教師で、23年の経験を有す。近年は療育にも携わっている。

①教室と家庭、保育所、幼稚園、小学校の連携について

「園や学校との直接の接触はありませんでした」

「(教室では積極的に)教科書にのっている鑑賞曲を、お稽古の前後工夫したりして、複数の生徒と一緒に聴いたりしていました。教科書の鑑賞曲を聴かせない学校もあり、子どもの方からリクエストがあったのがきっかけなんです。生徒さんに感想ノートを書いてもらって、それを見たりと、いろいろやっていました。楽典についての説明も、テスト前など、したことがあります」「学校の先生はプロ意識が強く、ピアノの先生はピアノの先生でしょ、といった感じがしました。ほとんど接触しない感じでした」「親御さんとは会話もあり、相談もいろいろと受けました。学校のこと、子どものこととその内容は多様でした。」

②連携への展望

「音楽療育に係わりながら感じるのですが、音楽は、やはり季節の中や生活の中であって、文化なんですね。感性と切り離せない。提供する側は、それを理解しないといけないと思います」「生活を豊かにしたり文化を伝承する。その上で活用するものが楽器であったり音楽なんですね。それを親や保育者に知ってもらふ必要があると思います。上から教えるのではなく、一緒にやってみよう、という形で伝えたいと思っています」「障害を持たれたお子さんの領域では、連携は積極的になされています。音楽療育の領域の連携の体制や方法、かなりノウハウが蓄積されているから。これを広げていくことはできると思います」

<Gさんへのインタビュー>

Gさんは、1歳からシニアまでを対象とした音楽教室の教師で、経験年数は15年である。主に要事を対象とするグループレッスンと個人レッスンを行ってきた。

①教室と家庭、保育所、幼稚園、小学校の連携について

「(保育所・幼稚園・小学校と音楽教室が)情報交換など連携することはありませんでした。」「(保護者とは)毎回、レッスンで保護者とお会いするので、お話をさせていただく機会は多くありました。」「毎年、生活発表会季節になると

「最近、あれてるんです。生活発表会の練習でしごかれて。」「最近、チェックみたいになっちゃったんです」「最近で、夜中うなされているんです」などなど。生活発表会の、激しい練習に、戸惑っておられる方が、いらっしゃいました。」「どんな、曲をするのかと演奏してもらったら、音楽教室でも、教えられそうにもない、高度な曲を弾いていて、びっくりしました。」

②連携の展望

(保育所・幼稚園・小学校の音楽教育に、への教室側からの期待としては、)「無理やり、教え込むのは、やめたほうがいい。怒鳴り声で歌うのは、素敵ではないことを教えてあげてほしい。先生の伴奏、練習してほしい。(下手でも、心がはいっているのと、はいっていないのでは全く違う)ハ長調の伴奏は、…やめてほしい。ピアノは、シールはってまで、教える必要はない。音響のいいデッキを使ってほしい。音がわれているのは、やめてほしい。」「保育所、幼稚園、小学校では、集団の中でこどもたち、夫々が主体となって、動いてほしい。お友達の活動をみて、なにかを得てほしい。のびのびと、活動してほしい。細かいことや、技術を教えるのはいかなものかだと思います。小学校低学年のピアノも、指またぎ、指くぐりとか教えていますが、全く、鍵盤を習ったことがないこどもには、かなり高度な技術だと思えます。」「音楽教室は、こどもの自主性を重んじつつも、その先に演奏技術が学べる機会がある所。」「保育所、幼稚園、小学校の音楽発表会、素晴らしいものができたら、親受けは、いいですけど、…こどもの実力以上のことを強引に教えてまで、…と思うのですが。」

以上より、音楽教室の教員から、園や小学校との連携がない現状が指摘された。一方家庭との連絡は私的教育機関では頻繁になされていることが伺えた。民間の施設も活用した、総合的な情報交換の必要性が指摘された。

4. おわりに

(1)連携の必要性への認識と実際の乖離

調査の結果から、それぞれが連携の必要性を意識していることが分かった。しかし、その方法は模索中であり、また責任の所在が明らかでなく、誰がどのように何を行うかのヴィジョンも明確でないことがわかった。アンケートの自由記述からもインタビューの対象者からも、連携の必要は認知されているが、それが自らの課題として十分に受け入れられていないことが明らかになった。その弊害は、不登校や就学後の子どもの気になる変化に気づきながらも、援助の手を差し延べることができなかった、という経験談にも如実に現れている。

音楽教育に注目してみると、連携の実態は全くといっていいほどなされていないことが明らかになった。小学校側は、音楽活動の機会や経験、特

に楽しい経験を就学前の教育に大いに期待している反面、技能偏重教育には否定的であり、また、保育者の音楽教育の質に懐疑的であり、怒鳴るように歌う、音程が合わないなどの弊害も指摘していた。同様のことは音楽教室の先生からも指摘されており、声域には発達過程があるので発達調査が必要であり、それを考慮した歌を提示するなどのガイドラインも必要であることが示唆された。

(2)移行プログラム開発にむけて

本調査から、幼稚園、保育園、小学校の児童の相互訪問、教師間の連絡会議までは実施されているが、教育の内容の伝達ができているとは言い難い実情が明らかになった。またその手続きが体系化されていないことも明らかになった。移行プログラムを開発する必要性があることが分かった。

ここで特に強調したいことは、子どもの学びに関するデータの提供システムの構築が必要であるということである。インタビューの中で、インタビュアーがCさんに、保育所と幼稚園のカリキュラムや指導案、活動概要を小学校に提供できないか打診したところ、上長に相談し、実施を試みたい、との回答を得た。他にEさんからも「情報を提供することは全然難しくないと思う」と実施が可能であるとの好意的な感触を得た。本調査では紹介しなかったが、インタビューに協力して頂いた他の保育者からも同様の意見を得た。大切なことは、提供する情報の質であると考ええる。Eさんが指摘するように、子どもの性格など「印象」で記載される内容は、保育者が意図せずとも子どもにマイナスな影響を与える可能性もある。仮に後に問題が生じた時に、その原因をいたずらに、例えば個人に起因するものとして、求めることにもなりかねない。そういった情報ではなく、子どもが実際に触れた楽器、歌った曲、経験したリトミックといった具体的な活動についての、後の教育につなげることができる情報を提供することが、保育者の職務として位置づけられる必要があると考える。

Fさんが指摘したとおり、音楽療育の領域では、保育者と小学校教諭の相互訪問が図られている。一般的にも障害にかかわる領域、経済や、生活、人権などの問題を抱える地域では、保育者と小学校教諭の相互訪問が図られている。小学校1年生の学級運営が困難であるとの指摘がなされている現在、これらの領域でなされている連携の姿勢やシステムを学校教育領域でも作ることは重要であ

り、また実現可能な課題であると考ええる。

連携を自らの課題として捉え、自らの現場で可能なことから実践を図ることが重要であると考ええる。子ども一人一人の今が重要であること、それぞれに個別のニーズがあることは、本論のインタビュー対象者全てに共通する認識であった。連携の必要は、障害や経済問題などをかかえる子どもに限られるものではない。

我が国では、実際に汎用できる教育プログラムや授業をつくるための教材開発には至っていない。この原因の1つとして、我が国の乳幼児教育機関では、教育カリキュラムの開発や評価にさほどなじみが深くないという傾向があったことがあげられよう。しかしグローバル化のもと、ナショナルスタンダードにそった専門職化、体系化、組織化が我が国の乳幼児保育教育領域においても導入されることが予測される。実際、基礎構造改革に伴い、保育所への第三者評価が導入されるようになった。機関、スタッフ、カリキュラム内容に加え、子ども評価が進められていくことが予測される。内容の体系化や評価基準の設定と実際の評価は、乳幼児教育の質を向上するためには重要である。また幼年期の学びの経験を小学校教育に活かし、小学校教育の内容を計画することは、個々の子どもの学びの特性と学習課程に対応した教育を計画することであり、効果的である。もちろん、かつてより幼児教育領域が重要視してきた、教育の営みにおける評価にそぐわない項目「表現する」「経験する」「鑑賞する」「楽しむ」といった内容を軽視してはならない。

これを考慮した、移行プログラムの具体的な開発が今後の課題である。まずは、次の課題として、実際の情報提供の試みを、協力地域における園および小学校間や、保護者対象の協力園でのアンケート調査により実施し、その成果を問いたいと考えている。

註

1) 1998年10月北野が教育史学会で「アメリカの幼稚園運動における保育の専門職化プロセス—幼小連携に関する初期の議論を中心に—」の報告を行った当時は、フロアーから「「幼小連携」とは何か」との質問を得た。当時はまだ、「定義が一般化しているとはいえない」との指導を受けた。現在では、「幼小連携」が専門用語として認知を得た観がある。

「幼小連携」の実践報告としては、「幼小一貫」教育の実践記録である、東京都港区立東町小学

校・幼稚園 1968 『これからの学校の追及と実践：子どもの質的發展を図る幼小一貫四四教育』、がある。この他、札幌市立東橋小学校(1972)、坂出市立中央小学校(1978)、上越教育大学(1987)、有馬幼稚園・小学校(2002)、広島大学(2002,2003,2005)鳴門教育大学(2004)などによる多数の報告書や著書がある。

幼小連携について論考したものとしては、高杉自子 1991 「幼児教育と小学校の連携を考える」『(改定) 幼稚園教育と評価：幼稚園教育指導要録記入のために』、無藤隆 2004 「幼小連携について考えておくべきこと」『幼年教育研究年報』広島大学大学院附属幼年教育研究施設、白川蓉子 2004 「幼稚園・保育所・小学校の連携」白川蓉子、稲垣由子、北野幸子、奥山登美子 『育ちあう乳幼児教育保育』有斐閣などがある。

2) カーター等のプロジェクトについては、以下が詳しい。

Corter, C., Bertrand, J., Griffin, T., Endler, M., Pelletier, J., and McKay, D. (2002). Toronto First Duty Starting Gate Report: Implementing integrated foundation for early childhood.

<http://www.city.toronto.on.ca/firstduty/reports.htm>

その他、連携の課題を扱ったものとしては多数ある。以下にいくつかあげておく。

Corter, C., Harris, P., and Pelletier, J. (1998). Parent participation in Elementary schools: The role of school councils in development and diversity: Transfer Grant Report to the Ministry of Education and Training of Ontario.

Pelletier, J. and Brent, J. (2002). Parent participation in children's readiness: The effects of parental self-efficacy, cultural diversity and teacher strategies. *International Journal of Childhood Education*, pp.45-60.

Corter, C. and Pelletier, J. (2005). Parent and community involvement in schools: Policy panacea or pandemic? In Bascia, N., Cumming, A., Datnow, A., Leithwood, K., and Livingstone, D., (Eds.), *International Handbook of educational policy*, pp.295-327. Kluwer Publishers.

3) 論者らは、2004年2月に「保幼小連携音楽カリキュラム研究会」(代表幹事：三村真弓)を立ち上げ、会則第4条に基づき、(1)乳幼児および児童の音楽能力の発達に関する研究と(2)保幼小連携音楽カリキュラムに関する研究の事業に従事している。その成果の一部は、以下のとおり。

Mimura, M., Yoshitomi, K., and Kitano, S. (2004).

Current Issues in Transitions to Elementary School 1st grade in JAPAN: Focusing on curricula coordination in Music Education. *PECERA 5th Annual International Conference and Meeting 2004* pp.69-70.

三村真弓, 吉富功修, 北野幸子(2005) 音楽教育における保幼小連携のための基礎的研究—音楽教育に関する意識調査を中心に— 教育学研究紀要 (中国四国教育学会) 第50巻. 267-272頁.

Kitano, S., Mimura, M., and Yoshitomi, K., (2005). Issues in Elementary School Transition in JAPAN: analyzed by direct and indirect interview focused on music education. *PECERA 2005 Sixth Conference: Understanding Individual and Cultural Differences among Children* p.286.

4) 論者は、家庭・園・小学校を結ぶ移行プログラムの開発を志している。その実現には、領域を精選する必要があると考え、現在、平行して音楽領域について系統的なカリキュラムの開発を試みている。音楽領域に着目した理由は、音楽領域が、「表現する」「経験する」「鑑賞する」「楽しむ」といった内容を含む領域であり、カリキュラムの内容や評価の標準化が難しい領域であることにある。本論でも述べたが、グローバル化社会の今日、専門職化、体系化、組織化が我が国の小学校さらには乳幼児教育保育領域においても導入されつつあるが、評価の難しい、しかし重要な表現や音楽領域が縮減されることには問題があると考え。これを考慮した、内容の体系化や評価基準の設定と実際の評価は、教育の質を向上するためには重要であり、音楽領域における移行プログラムの開発は、これに寄与するものであると考え、この調査を実施した。

付記

本調査を実施するにあたり、多くの方々にご協力頂きました。アンケートにご協力くださいました、佐賀大学文化教育学部附属幼稚園、同附属小学校、佐賀市内及び近郊の保育所、幼稚園、小学校の先生方、直接・間接インタビューに協力頂いた岩本憲道先生、木山由美先生、小坂哲也先生、小坂靖代先生、竹下由里子先生、田中淑子先生、徳永雅世先生、淵田陽子先生、百田英子先生、涌田幸子先生(ひらがな順)、M先生、O先生、Y先生に心より感謝申し上げます。その他にも、本研究を進めるにあたり、多くの園や小学校に観察に行かせて頂きました。また、多くの教育関係者の方々と議論を進めさせて頂きました。心より感謝

家庭・保育所・幼稚園・小学校連携の課題に関する一考察－質的分析を中心に－

申し上げます。なお、アンケートおよび直接・間接インタビューにご協力頂いた方全てのデータを掲載することはできませんでした。ここにお断り申し上げます。